

1 調査結果を踏まえた本校の状況

6年児童は、最高学年に進級するまで、生活指導上のトラブルも多く、学習規律が定着せず、全体的に学習への関心意欲が高いと感じることはなかった。6年生に進級したことを機に、学習態度に改善が見られ、授業に積極的に関わる児童が増えてきた。算数少人数授業では、担当する教員が熱意をもって授業改善に取り組み、下位の児童に対しても、身に付いていない既習事項への興味関心をもてるように工夫しながら、丁寧に指導している成果が表れ、当該学年で履修する基礎的な学習内容を理解できるまでになってきた。それと同時に、中位・上位層の児童の状況に合わせて基礎的な知識や技能を活用させる授業も重視している。今年度実施した全国学力状況調査の結果では、算数では、すべての項目で全国より平均が上であり、概ね東京都平均よりも上という結果であった。特に、「数と計算」「変化と関係」の正答率が高い。国語は、「情報の扱い方に関する事項(知)」以外は全て全国・東京都平均よりも低かった。昨年度の全国学力状況調査に表れた課題と今年度が全く同じであり、国語においては授業改善プランに基づいた課題解決がされていないといえる。本校児童の児童質問紙による調査に関しては、東京都や全国平均を上回る回答が多かった。ほとんどの質問で肯定率が高く、自己肯定感・幸福感が高いことがうかがえる。質問の回答から、課題の解決に向けて、児童自身が主体的・対話的で深い学びに取り組んだと考えていることも分かる。また、昨年度の課題であった、「自分の考えをまとめ、発表する場面」「友達と意見交換する場面」などでPCやタブレットを活用することに関して、改善プランを推進した効果が表れ、タブレットを活用することで、児童が自分のペースで学習を進められる、画像や動画音声資料があると分かりやすい等、学習効果を実感していることや、考えをまとめ発表する場面でタブレットを用いて友達と協力しながら学習が進められていると感じていることが分かる。

今後さらに下記に示す課題を解決していく必要がある。

国語：【知識及び技能】

- ・文の中における主語と述語との関係をとらえる。←昨年度から解決されていない
- ・漢字を文章の中で正しく使う。←昨年度から解決されていない

【思考力、判断力、表現力】

- ・目的や意図に応じて事実と感想、意見とを区別して書く。
- ・漢字を文章の中で正しく使う。←昨年度から解決されていない
- ・人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする。

算数：【数と計算】

- ・数量の関係を口を用いた式に表すことができる…正答率 96.6% 素晴らしい結果だった。その他の項目も正答率の数値に差はあるが、全国・都の平均よりは良い。

課題としては

【図形】

- ・球の直径の長さや立方体の一片の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表す問題の正答率が、33.3%と低かった。←深い理解を伴う知識の習得ができておらず、体積の単位とこれまでに学習してきた単位の間を考察できていない。

【データの活用】

- ・折れ線グラフから必要な数値を読み取り、言葉や数を用いて説明する力に課題が見られる。

2 教員組織等の状況

学力向上委員会と生活指導委員会の二つの委員会に組織替えをして3年目、各委員会の人数を多くした。学力向上委員会で、校内研究、OJT研修等で授業力を高める取組を推進し、児童には個別学習(前年度に習う算数の内容)・拡大個別学習(当該年度に習う算数の内容)で補習を行っている。また、児童の授業規律を徹底し、学力が高まる授業を実践するために生活指導委員会が中心となって規範意識の向上に取り組んでいる。課題については職層を意識した連絡・相談を徹底すること。特に学力向上については、経営・運営会議で概略を確認し、学力向上委員会が中心となって、全教職員に浸透させていきたい。

3 地域の状況

本校は、創立150年の伝統校である。児童の祖父母も保谷小学校出身など、地域に根ざした学校であり、学校の教育活動に対して大変協力的である。また、地域の子ども食堂は児童の学習の場としても支援をいただいている。新たな教育改革を行うためにPTA 代表委員会や学校運営協議会等の各種地域との会に管理職、教員が積極的に関わり、連携を深めている。

また、昨年度からコミュニティスクールとなり、地域学校協働活動等と連携をしながら、学力向上をはじめ、子どもの心を豊かにしていく取組を推進している。

4 前年度までに行った学力向上に係る取組を踏まえた本校の状況

- ① 全学年、放課後に週3回、個別学習時間を確保し、東京ベーシックドリルを活用して前学年の算数の習熟の徹底を図っている。また、月1回、6時間目等を拡大個別学習時間として設定し、現学年の学習に課題を抱える児童の基礎学力向上を目指している。

【東京ベーシックドリルによる算数平均正答率 7月現在】

低中学年では、7・8割の正答率である。高学年になると学習内容が難しくなり、正答率も下がる傾向がある。

- ② 昨年度の校内研究では、総合的な学習の時間を中心とした「自分ごととして課題を考える児童の育成」に取り組んだ。対話活動の定着、手立ての充実を図り、考えたくなる、話し合いたくなるようなしかけを取り入れた授業づくりを実践してきた。また、校内研究への職員の主体的参加(事前模擬授業・協議会)もあり、年間6本の研究授業(総合2、生活・体育・理科・外国語各1)により、教員全体の複数教科の専門性を高めることができた。その他に、OJTの充実(ICT研修・学力実態調査を生かした授業提案など)を挙げることができる。

課題

- ① 児童の行動目標を作成し、課題を明確にして主体的に学びにかかわらせるような、学級経営的な視点による研究も行ってきた。課題として、一人一人の学びの深まりや対話の効果に差が生じたことが挙げられた。
- ② 特別支援教育の視点(視覚化・焦点化・構造化)を取り入れた指導法の習得及び導入と山場を意識した授業展開を行う必要がある。

5 本校で取り組む学力向上策

- ① 個別学習時間・拡大個別学習時間の指導の充実を図るために、指導者として担任に加え、専科教員も指導に入り、全校体制で基礎学力の充実を図る。
- ② 算数で学ぶ基礎的な知識・技能の定着を図るために、基礎・基本に関わる掲示物を教室・廊下に掲示する。
- ③ 水曜日の給食後に全校でeライブラリー実施の時間を設定し、既習事項を復習する。また、授業や家庭学習の課題としてeライブラリーを積極的に活用する。また、確認テストを活用して教員が児童の課題を把握する。
- ④ 今年度の校内研究では、研究教科を算数にし、「よりよいものを求めて自分の考えを吟味することができる児童の育成」とした。数学的な見方・考え方を働かせる算数の授業づくりを通して児童の学びに向かう姿勢の向上を目標に掲げた。目指す児童の姿は
 - ・児童自ら問いを見付け、算数と実生活とのつながりを見付けることができる児童
 - ・問題に対して主体的に関わることができる児童
 - ・自分の考えと友達の考えをつなげていくことができる児童
 - ・算数の楽しさを実感することができる児童
 - ・算数で何かを解決したくなる、話したくなる(表現したくなる)児童 である。
- ⑤ ICTの効果的な活用に関しては、調査結果から確実に効果が表れたといえる。今後も、とにかく使う、積極的に活用することを徹底して行うこととしている。効果的な活用についてはさらに全体でOJTなどの場で検討していく。
- ⑥ 特別支援教育の視点を取り入れた指導法の習得(視覚化・焦点化・構造化)及び導入と山場を意識した授業展開を行っていく。
- ⑦ 全国学力調査の結果を基に、児童の誤答が多い問題は、学力向上委員会が誤答の傾向や原因を分析し、改善策を考え全教職員で共通認識をもつ。

6 具体的な授業・指導の改善のポイント

国語の指導は 聞くこと話すこと・書くこと(漢字含む)・読むことと指導は多岐にわたるが、本校児童の課題から考えると、子どもたちが漢字を文の中で正しく使うこと、目的や意図に応じて事実と感想、意見とを区別して書く必要がある。学習指導要領の指導事項を学年順に整理し、きちっと理解するとよいと考える。まずは指導する教員自身が皆そのことを分かってできることが大事かと思う。

- ① 経験したこと・想像したことを書く→感じたこと・考えたことを書く
- ② 相手や目的を意識して書く
- ③ 順序に沿って書く→中心を明確にして書く→筋道の通った文章を書く
- ④ 書き方を工夫する(文と文の続き方→自分の考えとその理由→事実と感想・意見 引用)

いずれにしても、既習の漢字を使って文章を書かせること。文章を書く抵抗感をなくすこと。日々の一行日記や行事作文に取り組みさせるなど、書くことを日常化させる。苦手な児童には話したことを文に書かせるなど、基本的なことを繰り返し実践することで、児童の各力を伸ばす。やはり全ての教科における資質能力の育成や学習基盤となるものは言語能力であり、語彙を豊かにすることは何よりも大切である。そのために、全校で俳句に取り組ませている。

算数の指導の第一の目標は、日常の事象を数理的に処理する技能を身に付けるということ。計算ができる・量の単位や測定ができる・数量の関係を捉えられる・平均や確立などデータの活用ができる…これらは日常生活に必要な知識・技能であるから、解答の正確さが求められる。そのために、「はやく・かんたんに・せいかくに・どんなときも」解けるより良い方法を導き出すことが算数的活動の楽しさと考える。特に算数においては、系統性が大切である。

1年生で100まで数えられ、2年生で4位数の構成と位取りを理解し、九九を覚える。3年生で分数・小数の意味と相対的な大きさを理解し、4年生で十進位取記数法の学習が完成し、概数で表せるようになり、分数小数の足し算引き算ができるようになる。それが5・6年生の割合や分数の掛け算割り算につながっていく。だから、どの学年でも取りこぼしてはダメな教科である。次の学習につなげるために、その学年でその内容を必ずわかるようにしてあげる必要がある。授業で言えば、「前時までの既習事項の復習→これまでに学んだことを生かし、今日の課題が解決できるかやってみる→よりよく課題解決ができる方法を見付け出す→適用問題で知識・技能を確かなものにする。」これが一単位時間に全部含まれているのが算数のいい授業だと考える。

理科の実験や理科観察の指導は、基本的には観察力と推論力 これは、**社会科**でも同じである。社会科は基本的に、事実認識→関係把握→価値判断 という流れを体感できていること。

理科はそれに比較対照実験、仮説検証実験のポイントを身に付けることが求められる。

- ① 事象→疑問→課題(問い)→仮説→実験方法の工夫→実験・観察・記録
- ② 結果→考察→結論→問いを解決
- ③ 実験装置のセッティングと安全確保のための各種方策。

体育科の指導は指導要領の考え、運動(題材)の特性、児童の実態をよく踏まえた授業をすることが重要である。

- ① できないとつまらないし、悲しいし、やる気が出ない
- ② できないと恥ずかしいし、怖いし、逃げたくもなる
- ③ だから、できないと嫌いになる。これでは生涯体育につながらない。
- ④ できるようになったという感覚に加え、たとえできずとも運動が楽しい・気持ちいいという感覚を実感させることが最も重要。個に応じた指導のポイントと声掛けをすること。
- ⑤ 自分の生活のすぐ隣に運動がある。そんな人生を過ごさせることを目指す。

7 最後に

まず、教員一人一人が自分はプロの教師であると自覚してもらいたい。教える内容について理解していることは教師として当たり前である。そして子どもの学習活動は児童の実態を考慮し計画し、どんな教え方をするかというより、どんな学習活動をさせて、どのように学ばせるか、を考える。ここは、教師の話を集めて聞かせるといった学習活動があってもよい。子どもが「〇したい!!!」と思える授業、もっと学びたい、もっと話を聞きたい、もっと知りたい、もっとやりたいと…目の前の結果だけにとらわれず、大切なものを育てる気持ちをもってほしい。自ら学び続けることのできる子どもを育てていくには、勉強を教えるのではなく生き方を教えるべきだと思っている。